

# 山王廃寺跡第7次発掘調査報告書



前橋市教育委員会

1982.3

(表紙) 女人塑像頭部

昭和34年、山王庵寺塔跡の保存工事に際し、塔心礎の南東より出土したものである。頭部のみの残存であるが、頭髪に良く特徴を留めており、顔全体にふくよかさが認められる。白鳳期の作と推定されており、山王庵寺と同時期のものと思われる。(全長約8cm)

(住谷修氏所蔵、群馬県立博物館写真提供)

## 序

我が國の古代文化は、仏教文化を母体として畿内地方を中心と思・藝術・技術など各方面の開花をみました。

畿内から遠く離れた上野国でも、八世紀中葉には国の華國分寺が造立されました。国分寺に先行して、上野国に仏教文化が見事に開花したことを物語るのが山王庵寺であります。

市教育委員会は、この重要遺跡の保存及び保存計画のため昭和49年以来学術調査を重ね、ここに第7次発掘を実施、当史跡の調査を一応終了することといたしました。

今回の調査は、本遺跡の中心となる、塔基壇と寺域の広がりの確認を中心とした調査で、今後山王庵寺研究の基礎となる塔の規模・版築の構造等の資料を得ることができました。

山王庵寺跡の発掘調査は第7次調査で一応終了したことについては、まだまだ多くの未解決の問題がありますが、山王庵寺の中心と推定される部分は、ほとんど民家が立並び、現状では発掘調査が不可能なためであります。幸いに将来その時を得ることができればと思っております。

昭和49年以来、発掘調査のために便宜をお与えいただいた土地所有者・地元の方々からは、物心両面にわたりご援助・ご協力をいただき、予定通り調査を終了することができました。また、調査にあたり、種々ご指導、ご助言いただいた方々に対しても併せて厚くお礼申し上げます。

おわりに調査報告書を刊行するにあたり、多くの関係者各位に心より感謝申し上げるとともに、この報告書が広く活用され、山王庵寺をご理解いただく一助になれば幸いと存じます。本県第一級の文化財が永く保護されることを望む次第であります。

昭和57年3月31日

前橋市教育委員会

教育長 金井博之

## 目 次

序		15
I 発掘調査の経過		1
1. 調査にいたるまで		1
付 山王庵寺跡出土の施釉陶器について		3
2. 調査の目的・方法		3
II 発掘調査の概要		4
1. 地 質		4
2. 遺構		5
(1) 遺構の概観		5
(2) 塔 跡		6
(3) 金堂 跡		7
(4) 据立柱建物跡		8
(5) 壓穴住居跡		9
(6) ピット		11
3. 遺 物		11
(1) 瓦 類		11
a 軒丸瓦		11
b 軒平瓦		15
c 文字瓦		16
d 道具瓦		17
(2) 土器・陶器類		17
a 壑穴住居跡出土上器		18
b 瓦窓状ビット出土土器		18
(3) 古 銭		21
(4) 鉄製品、その他		21
III 考 察		22
1. 山王庵寺跡出土軒丸、軒平瓦について		22
2. 塔使用瓦について		24
IV 結 語		27
付 1 山王地内出土の地蔵菩薩立像について		30
付 2 瓦の胎土分析について		31

## 凡 例

1. 本報告書は、国庫・県費補助による昭和56年度埋蔵文化財保存事業山王庵寺跡発掘調査の概要をまとめたものである。
2. 発掘調査は前橋市教育委員会が主体となり、昭和56年10月1日～11月14日の期間実施した。
3. 報告書の執筆、および編集は田口正美が担当した。

なお、Ⅰ-3 (b), (4) は、近藤昭一が分担執筆し、付 2 については、県工業試験場花岡鉢一氏に分析ならびに原稿を依頼した。

遺構撮影 唐沢保之、松井国光

遺構製図 田口正美、新保一美

遺物実測製図 田口正美、安藤友美

遺物撮影 田口正美、近藤昭一

4. 出土遺物は、前橋市教育委員会で整理保管している。

# I 発掘調査の経過

## 1. 調査にいたるまで



補圖1 推定寺城現況図

山王庵寺跡の発掘調査は本年（56年度）で第7次を迎えた。途中、1年間の検討、整理期間を置いたが、通算7年間に及ぶものであり、その間にいくつかの成果を挙げることができた。

本年度に至るまでの第1次から第6次までの調査の概略は下記のとおりである。

□第1次発掘調査（49年度） 調査主体：山王庵寺発掘調査団 団長：尾崎喜左雄

推定寺城（塔心礎を中心として方2町）の縁辺部を調査した結果、心礎から北へ110m付近で掘立柱建物跡の一部を確認した。塔心礎からはば1町という距離から北門跡であろうとの推定がなされ、これが北限を示すものとされた。

□第2次発掘調査（50年度） 調査主体：前橋市教育委員会

塔跡の北40m東30mに存在する磐石群の関連遺構の検出を目的としたが、わずかに堅穴住居跡と掘立柱柱穴跡が発見されたのみで、寺院に関する確かな遺構をとらえることができなかっ

た。

□第3次発掘調査（51年度） 調査主体：前橋市教育委員会

前年度にひき続いて礎石群一帯を調査し、礎石群A・礎石群Bという2棟の礎石を有した建物跡、およびこれに東隣し、掘立柱柱穴跡と見られるピット列を検出することができた。検討の結果、礎石群Aは中世期の遺構と見なされ、礎石群Bが寺院に関連する遺構と推定された。

□第4次発掘調査（52年度） 調査主体：前橋市教育委員会

第1次調査の際に検出された掘立柱建物跡の形状、規模の確認を目的としたが、その結果、掘立柱建物跡は梁行3間、桁行9間の東西棟であることが判明した。そのため、本建物跡は規模形状、位置等から推して、僧房及至食堂と推定され、北限はさらに北へ伸びるものと予想された。

□第5次発掘調査（53年度） 調査主体：前橋市教育委員会

前年度調査結果をうけて、掘立柱建物跡の未発掘部、および周辺部の調査を行った。掘立柱建物跡は3間×9間の北側と南側に、これと平行して柱穴のあることが確認され、「縁」あるいは「廟」を伴うものと推定された。また、東に隣接して総柱の掘立柱建物跡（梁行3間桁行3間）等が数棟検出された。

□第6次発掘調査（54年度） 調査主体：前橋市教育委員会

塔跡に西隣した基壇建物跡（東西長16.6m以上、南北長17m以内）、および塔基壇に付随すると思われる白色粘土表面を検出した。基壇建物跡は瓦を多量に伴うこと、南面する東西棟であること、塔跡に隣接することなどから金堂跡と推定されるに至った。

本年度はこれらの成果をうけて、日枝神社境内地とその周辺部、および推定寺域内の南東隅付近を中心として調査を行った。しかしながら、日枝神社境内を始めとして、寺域内には家屋等が密集して存在することから、これらの閑地をねって調査場所を選定した。

発掘調査期間は10月1日より11月14日までの約1ヶ月半であり、第2次～第6次調査と同様、国・県補助事業として、前橋市教育委員会の直営のもとで実施されたものである。

遺跡所在地 前橋市總社町總社昌楽寺廻り一帯

発掘場所 前橋市總社町總社2408番地 他8筆

調査組織 担当者 松本 浩一、福田 紀雄、唐沢 保之、田口 正美、近藤 昭一

調査補助員 松井國光

作業員 相沢よし子、石井 信子、榎田みどり、小沢 栄一、佐藤 敦子、  
住谷 静子、住谷 文彦、新保 一美、田中 広明、塚越 覚司、

中村 眞子、林 留美子、藤田 光夫、森川 博治、米山いはね

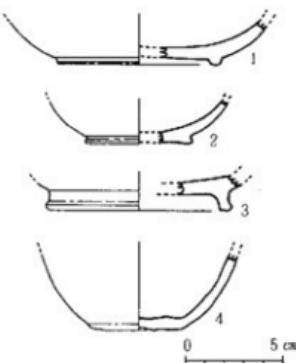
協力者 山王地区自治会、山王農事組合、都丸甲子郎氏、阿久津利夫氏、阿久津貞雄氏、  
阿久津静治氏ほか

(注) 第2次～第6次調査の詳細については、各次報を参照されたい。

### 付 山王庵寺跡出土の施釉陶器について

灰釉陶器は第7次調査まで10片近くが発見されている。いずれも小破片であり、原形を推定できるものは少なかったが、製作地を求めるに概して猿投系統と東濃系統のものに別れるようである。時期的にはO-53期(猿投)、虎渓II-1、丸石I-2(東濃)等11世紀半ば以降のものが大勢を占めるが、K-14期に比定される高台鉢が出土している。

綠釉陶器も同じく20片程度発見されているが、小破片ながらも器形を推定もできるものが多数存在する。製作地は猿投系統と近江系統に2大別され、時期的には多くがK-90期に比定されるようである。



插図2 施釉陶器実測図

	挿図	形態(器形)	胎土	色調	製作地	時期
灰釉	2-1	高台鉢の底部	均質な灰色土	緑がかかった灰色	猿投系	K-14
綠釉	2-2	小瓶の底部(径5.9cm)	均質な赤褐色土	緑がかかった黄褐色	近江系	K-90
	2-3		均質な灰色土	濃淡のある緑色	猿投系	K-90
	2-4	短脚壺の底部(径4.8cm)	緻密な白色土	明黄色	鳥海(猿投系)	?
	3	碗の底部(径9.4cm)	均質な灰白色土	淡緑色	猿投系	K-90

表1 施釉陶器一覧

## 2. 調査の目的・方法

山王庵寺跡の発掘調査の目的は、寺域の確認、寺の規模・性格の究明を図り、遺跡の保護・活用を推進することにある。かかる目的の中で、本次は次のような目標を設定し、発掘調査を行った。

①塔心礎を中心とした塔跡の規模、性格等の確認を図る。

②第6次調査で検出された金堂跡の東西長を求める、あわせて規模の確認を図る。と同時に「廻廊」等の遺構の存在を確認しようとする。

③綠釉水注(重要文化財)等の発見された近辺の遺構の存在を確認するとともに、寺域推定(特に南東部)のための資料を得ようとする。

これらの目標に沿って、6地区に亘る発掘調査区域を設定し、A・B・C・D・E・F区と命名した。A・B区は①の目標に關連し、C・D・E区は②の目標に、F区は③の目標に關連するものである(挿図1)。

トレンチ発掘を原則とし、遺物については遺構に直接かかわらないものはトレンチ毎に層位をしるしてとりあげた。また、レベルは塔心礎上面をレベル原点とし、残りのレベル数値は全て原点よりの高低差を示している。(単位cm)

## Ⅱ 発掘調査の概要

### 1. 地層

山王庵寺跡の発掘調査は過去6次に亘って行なわれてきており、推定寺域内では標準層位に大差ないことが確認されている。

本年調（第7次）はかかる成果を受けて、寺域の中心部と南東隅部の調査を行なった。その結果塔東側と南東隅に設定したトレンチでは耕作による擾乱が激しく、自然堆積の状況を把握することはできなかった（特に、塔東側ではそれが激しく、ロームの上層は全て耕作土といった状況であった）が、金堂跡南側を中心とした地域では比較的地層の残りが良く、自然堆積の状況を知ることができた。本年度の調査区域の層位も基本的には第6次調査の標準層位と同様の傾向にあるが、これを示せば次のようになる。

I層 耕作土 厚さ40~50cm。砂質性の黒褐色上で、株名二ツ岳系軽石（F系軽石），B軽石，炭化物等を含む。

II層 黒褐色土 B軽石を多量に含み、砂質を呈する。広範囲に帶状を呈して堆積する場所は少なく、多くがピットの埋土として確認される。

III層 黒褐色土 厚さ30~60cm。所謂、瓦を中心とした遺物包含層であり、この他にF系軽石，C軽石、炭化物、焼土粒を多量に含む。粘性、および含有物の相違から4層の細分が可能である。

IIIの①層 炭化物、瓦を多量に含む黒褐色土。若干の粘性をもつ。

IIIの②層 F系軽石、灰白色土ブロックを含む暗褐色土。粘性、しまりともに増す。

IIIの③層 シルト質の白色ブロックを主体とする。

IIIの④層 C軽石、F系軽石を多量に含む強粘質黒褐色土。

IV層 黒色土 厚さ10~20cm。C軽石を多量に含む。

V層 黒色土 厚さ20cm前後。粘性に富むが、軽石を含まない。

VI層 茶褐色土

VII層 シルト質の灰黑色土 北側の塔を中心とした地域では同レベルで水の影響を受けたと考えられるローム層が確認されている。

なおIII層はさらに細分が可能であるが、大別して4層とした。

標準層位をもとに地層と遺構の関係について統括的に見ると、全ての遺構がV層堆積以降II層堆積以前に位置しているといえる。

#### ①塔跡

塔跡北側に設定したトレンチにおいて、塔基壇を取り巻くと考えられる白色粘土帯が確認されたが、これはIIIの③層直上に構築されていることが判明した。

#### ②掘立柱柱穴跡

IIIの②層、およびVII層より掘り込まれていた。埋土はC軽石を含んだ粘質土であるが、完全に

埋没した段階で、Ⅲの①層、Ⅲの②層が堆積している。その他、D区を中心として、掘り方の比較的しっかりしたピットが検出されたが、いずれも上部をⅡ層が埋めていた。

#### ⑤堅穴住居跡

29号住居跡から33号住居跡まで合計5軒の堅穴住居跡が検出されている。29号住居跡付近には部分的にIV層が見られ、掘り方はIV層上面から確認された。また、30号住居跡については、VI層上面が掘り込み面と考えられたが、残りの31号住居跡から33号住居跡は地層の残りが悪く、掘り込み面の確認は不可能であった。埋土は29号住居跡が完全に埋没した段階でⅢの③層が、30号住居跡が半ばまで埋没した段階でⅢの②層が堆積していることが確認された。

## 2. 遺構

### (1) 遺構の概観

本年度の発掘調査で、発見検出された遺構は次のとおりである。

塔跡 1、堅穴住居跡 5、掘立柱柱穴跡 2、ピット 11

塔心礎を中心として設定したトレントによって、塔跡の規模を確認することができた。塔心礎を中心として北へ7m西へ7mの地点まで基壇が見られることから、一辺14mの正方形基壇をもつものと考えられる。塔跡の北側では第6次調査によって検出された白色粘土上面が確認された。塔跡の西側のみにとどまらず、北からも発見されたことから塔跡の周囲を白色粘土面の層が取り巻いていたことが判明した。また、塔跡北側の白色粘土面直上には親指大の玉石が5cmの厚さで敷設されていた。

第6次調査で検出された金堂跡は、調査面積の制約から南北長16.6m、東西長16mの範囲の確認のみであったが、金堂跡西側へ入れたトレントから東西長は24mには達しなかったことが判明した。

堅穴住居跡は、A区（日枝神社境内）で1軒、E区（金堂跡南側）で2軒、F区（推定寺域南東部）で2軒を確認した。いずれも完掘には至らなかったが、いずれも方位を北方向にとる。29号住居跡は塔跡と重複しており、これに先行することが判明している。30号住居跡はカマドが確認され、袖部が粘土によって構築されていた。32号住居跡は東壁、西壁に沿って周溝が走っており東西長は3.20mを測る。

金堂跡南側を中心として多数のピットが検出されたが、そのほとんどがB軽石混じりの黒色土によって埋められていた。このうち、瓦溜まり状ピットは他とは様相を異にし、瓦片に混じって多数の須恵器が完型に近い状態で埋められていた。

その他、掘立柱建物跡の柱穴と思われるピットが2個検出された。掘り方もしっかりとしており未完掘ながら平面矩形を呈すると考えられる。新旧関係があり、東のピットが西に先行することが地層断面より判明している。

## (2) 塔跡(挿図3、図版1)

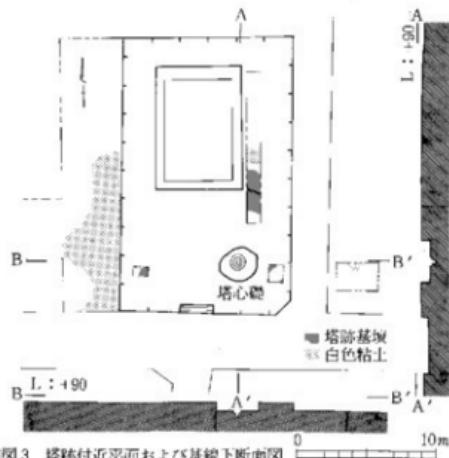
塔跡については、第6次調査により塔基壇の一辺長が17.2m以内にくること、およびこれを取り巻く形で厚さ10cm程度の白色粘土帯が敷設されていたことが確認されている。

今年度はこの成果をもとに、塔跡の規模、性格等、さらに詳細なデータを得るために発掘調査を行なった。

その結果、塔心礎の北側に入れたトレンチ(A-1)より塔基壇の北側を、さらに西側に入れたトレンチ(A-3)より塔基壇の西端をそれぞれ確認することができた。これは塔心礎の轟利孔中心を基点として測定したとき、北端、西端ともに7mの距離に位置するものである。塔心礎の所在する日枝神社境内は擾乱がかなり進んでいるが、北側7m付近を中心として比較的現形に近い瓦が一次堆積に近い状態で堆積していたことは、この数値を裏づけることになろう。

また、第6次調査で確認された白色粘土面が北側へ入れたトレンチでも検出され、塔基壇の北端でこれに連続する形で北へ伸びていることが判明した。Ⅲの⑧層上に敷設され、現状では幅1m50cm前後のみ確認されただけであるが、これ以北に擾乱が及んでいることを考え合わせると、敷設当初の範囲はさらに北へ伸び、幅が広くなるものと思われる。さらに、白色粘土面の上には親指大の玉石が10cm内外の厚さで散かれていたが、これは塔跡西側とは様相を異にするものである。

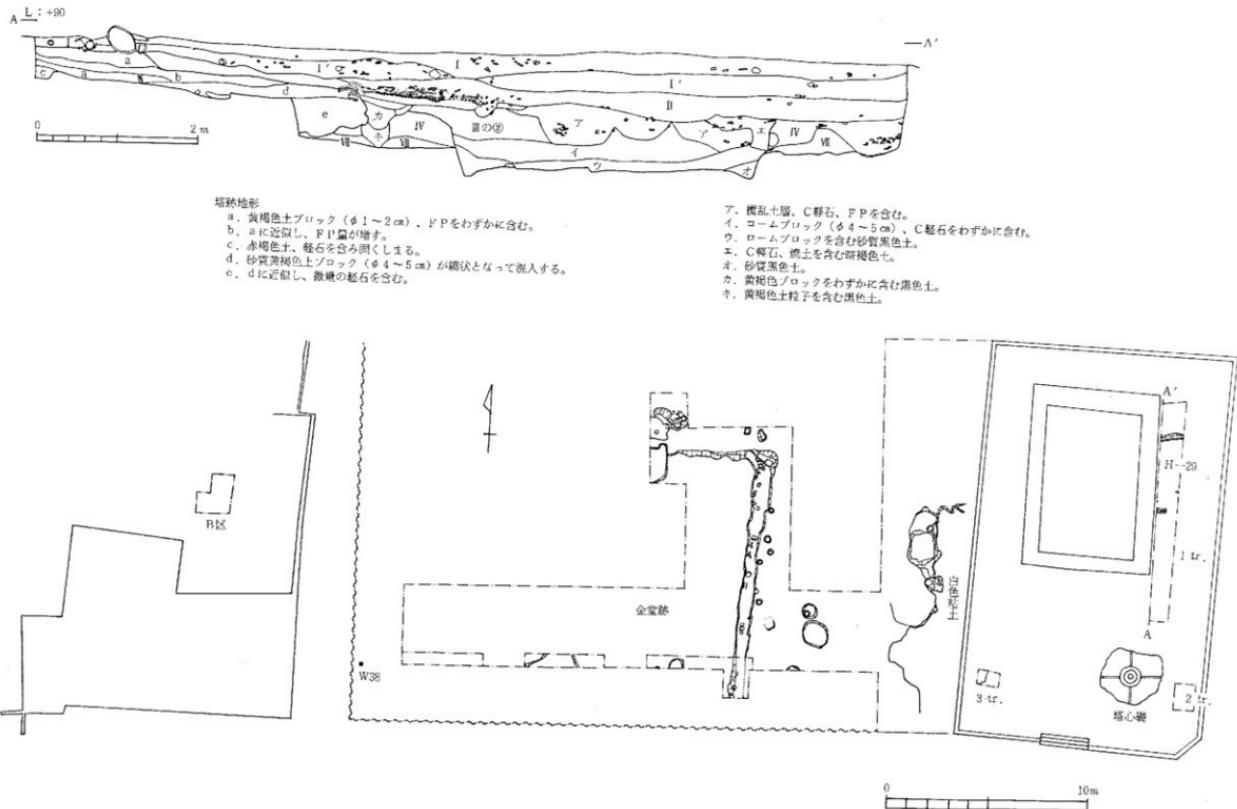
塔基壇の地形については、既に第4次の発掘調査概報に報告されている。これは塔心礎を覆う上屋の再建工事に際し、心礎南側の地層断面の観察を行なったことに基づくものである。今年度も心礎の東側で基壇の断ち割りを試みたが、第4次調査における心礎南側と同じく、13ないし14層におよぶ版築の様子を確認することができた。これによれば、版築は140cmの厚さをもち、ローム層の上に一層が50cmから20cmで、白色粘質土、C軽石を多量に含む黒色土、黒色粘質土等を交互に積み上げ、かたく叩き締めていることが判明した。ローム層は塔心礎北側ではレベル—5cm前後で確認されているが、基壇部分では—110cm前後で現われることから、塔基壇は地山を1m近く掘り下げ



挿図3 塔跡付近平面および基壇下断面図

た「掘り込み地形」であることをうかがわせる。また、レベル—80cmにおいて人頭大の川原石が確認されたが、これは塔心礎の采石として置かれたものであろう。

このように塔心礎を中心とした極く狭い範囲では南、および東側において「掘り込み地業」にともなう版築が確認されているが、塔心礎の北2m80cm以北ではここで見られたような版築は検出されなかった。Ⅲの⑧層を40~50cm程掘り下げてはいるが、所謂「版築」のように整然と積み上げられたものではなく、最下層



插図4 塔跡および金堂跡平面図

に50cmの砂質黄褐色土ブロックを含む褐色土を置き、この上に成分の均質な暗褐色土、赤褐色土を3層、ないし4層に積み上げたものにすぎない。塔心礎部分の整然とした版築に比べて非常に簡便な方法がとられているといえる。塔心礎以外の礎石・栗石等については調査範囲が狭小であったこともあって発見できなかったが、擾乱がかなり進んでいることを考え合わせると抜きとられている可能性が大きい。また、基壇の外装は北端で基壇に差し込まれるようにして平瓦が検出されたことから、「瓦積み化粧」を推定させた。

塔基壇の北端付近を中心として平瓦の堆積を見たが、大部分を平瓦、丸瓦が占めている。軒丸瓦は破片ながら複弁八葉蓮華文の出土を多く見た。

また、白色粘土面、およびこれに付随する玉石は擾乱によって幅1m50cmのみの確認であったが、この白色粘土面下より皇朝十二錢9枚分が発見して出土している。全てが判読可能であり「隆平永寶」2枚「富淳神寶」7枚を数えることができた。

この古銭はいづれも白色粘土面下に存在する土壤中より出土したものであり、このことから「隆平永寶」「富淳神寶」の鋳造以後、すなわち九世紀前半以降に塔跡周辺の再整備が施されたことが推定される。

なお、第6次発掘調査において、塔西側から屋根よりずり落ちた状態のままで多量の瓦が出土したが、これを覆う形でB軽石混りの砂質土が確認されており、古銭の川土と合わせて、塔の崩壊時期は一応九世紀前半以降、B軽石堆積以前に限定されることが指摘される。

### (3) 金堂跡

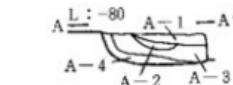
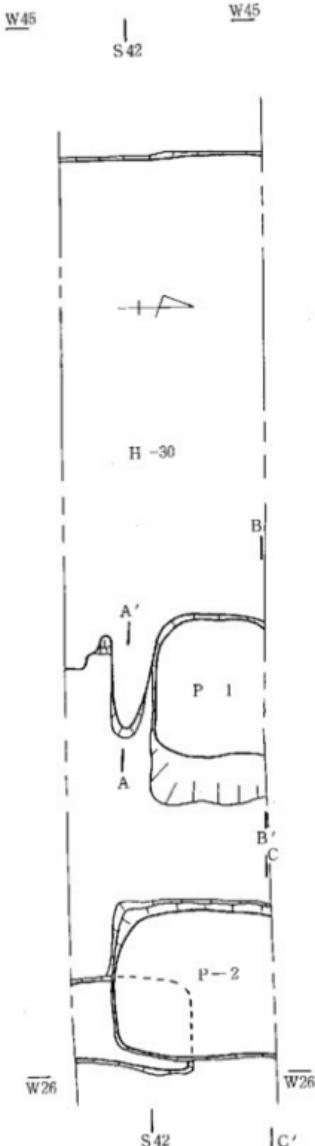
第6次調査によって検出された、塔跡の西に位置する基壇建物跡は基壇の東端、および北端が確認され、その位置、規模、走向、性格等から金堂跡と推定されるに至った。確認された範囲で東西長16.6m、南北長11.70mを測り、南限は心礎より南8m西24mに入れたサブトレーンチ内で基壇の痕跡が見られなかったことから、17mにはおよばなかったと考えられたが、西限はさらに西に伸びるものとされ、調査範囲内での確認には至らなかった。  
(注1)

今次発掘調査は金堂跡の西端の確認を目的とし、C区トレーンチを設定した。調査場所は民家の庭先で、塔心礎より西へ42.5m北へ6mの位置であり、また、金堂跡の東端から測ると西へおよそ24mに位置するところである。トレーンチは地表面から一層ずつはいでいったが、表面より1m掘り下げたところから自然堆積とは全く異なる様相を呈しており、人為的なものを思わせた。しかし、Ⅲ層まで掘り下げた(地表面よりおよそ170cm)ところでは、所謂金堂跡で見られた「版築」状の地形は確認できなかった。また、自然堆積土はⅢの④層から確認されているが、この土には、Ⅲ層を主体とした十層が堆積しており、地形と思われる痕跡は見られなかった。遺物はプライマリーな出土状態を示すものは全くなく、擾乱土層中ににおいて、若干の瓦片が発見されたのみであった。尚、この中より瓦当周縁部、および裏面の完全に剥離した素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。

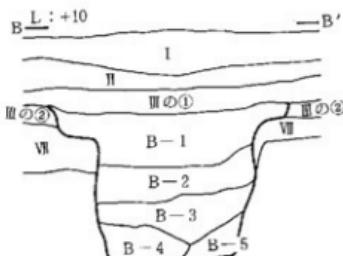
以上、「版築」状の地形が見られなかったこと、およびここから殆んど瓦の出土が見られなかつたことから、金堂跡の東西長は24mには違しなかったものと推定される。

(注1) 山王院寺第6次発掘調査報告書 9頁

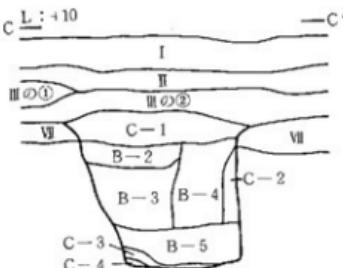
(4) 挖立柱柱穴跡



- A-1 黒色土(白色粘質土と赤褐色土のブロックが点在する)
- A-2 黒色土(白色粘質土ブロックを含む)
- A-3 茶褐色土(燒土と白色粘質土のブロックを微量に含む)
- A-4 黒色土(燒土粒が点在する)
- ※ いずれの層も水の影響を強く受けている。



- B-1 噴褐色土(C軽石・黄褐色土ブロック・燒土を多量に含み堅く締まる。部分的に白色粘土が混入する)
- B-2 黑褐色土(白色粘土・褐色土ブロックを多量に含み、粘性を呈す)
- B-3 黑褐色土(B-2に成分は同じであるが、より粘性を増す)
- B-4 暗褐色土(多量の砂と暗褐色土の混土)
- B-5 灰白色土(砂を主体とする)



- C-1 暗褐色土(C軽石を主体とし、これに微量のF.P.が含まれる)
- C-2 赤褐色土(強い粘性を呈す)
- C-3 灰白色土(砂を多量に含む)
- C-4 灰白色土(砂と赤褐色粘質土の混土)



挿図5 挖立柱柱穴跡平面および地層断面図

E区(S42W29)において、非常にしっかりした掘り方をもったビットが検出された。P-1はカマド付近で30号住居跡と重複するが、地層断面より住居跡が完全に埋没した段階で掘られていることが判明している。また、P-2はP-1の東に位置し住居跡との重複関係はないが、東南隅にビット状遺構がかかっており、これより新しいものと思われる。いずれも完掘には至らなかつたがP-1は東西に長く、P-2は南北に長い平面矩形を呈するものと推定される。P-1の掘り込み面はⅢの④層であり、P-2の掘り込み面が層面であることから、同一時期のものとは思われないが、いずれもしっかりした掘り方をもつことから、掘立柱建物の柱穴と考えられる。特にP-1については調査面積が狭小であったために、東西、南北への面的な広がりについて十分に調査し得なかつたが、柱穴の走向、掘り方等から鑑みて、寺院に関係する建物の柱穴跡と推定されるものである。

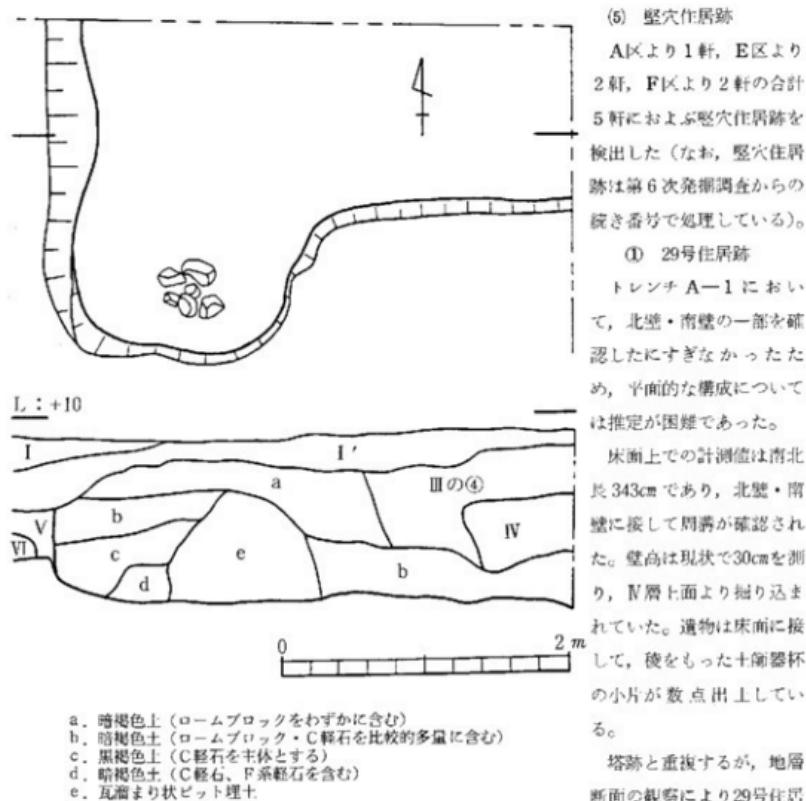


図6 31号住居跡平面および地層断面図

確認されている。

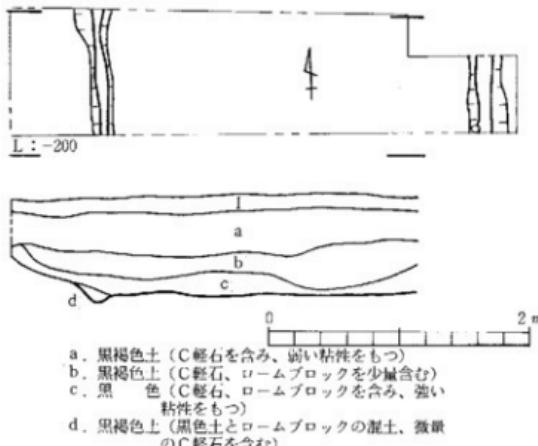
### ② 30号住居跡（挿図5）

E区において、東壁と西壁の一部、およびカマドが確認された。

東西長は床面上で439cmを測るが、周溝・柱穴等の施設は発見されなかった。

また、東壁にかかってカマドが検出されたが、両袖を粘土によって構築されており、多量の灰に混じって土師器小片が出上した。

E区は特に西側部分にお



挿図7 33号住居跡平面および地層断面図

いて水の影響を強く受けているが、30号住居跡もカマドを初めとして水による影響が見られた。

### ③ 31号住居跡

E区の東、30号住居跡より約15m離れて31号住居跡が検出された。

ピット（挿図8）と重複しており、掘り込み面等は明確にし得なかつたが柱穴を有しており、平面矩形を呈するものと思われる。壁の走向は北東方向をとっている。

### ④ 32号住居跡

F区の東で検出された住居跡で東壁と西壁の一部を確認したにすぎなかつた。

壁高は30cmを測るもの、擾乱等によって掘り込み面の確認は困難であった。埋土層上部より糸切り痕を留める土師器杯の小片が出土している。

### ⑤ 33号住居跡（挿図7）

32号住居跡の西1mにおいて検出されたものである。

32号住居跡と同様、東壁、西壁の一部を確認したにすぎなかつたが、床面の一部に焼けの痕跡を認めることができた。周溝が走っており、C砂石含みの黒色土が住居を埋めていた。

#### (6) ピット

E区において、多量の瓦によって埋められた瓦満まり状ピットが検出された。31号住居との重複が見られたが、地層断面により住居の廃棄後、穿たれたことがわかる。完掘には至らなかったが、平面矩形を呈すると思われる。Ⅲ層より掘りこまれており、C軽石、ロームブロックを含む黒色土が埋めていた。また瓦の中には平瓦、丸瓦を初めとして隆起線文軒丸瓦や重弧文および唐草文意匠の軒半瓦（挿図11-4）等が含まれた。

前述の如く、多量の瓦がピット部から上部まで間隙なく埋めていたが、これらに混じって多量の須恵器が発見されている。国分期を中心とした土師器杯が殆んどであるが、この時期不要になった瓦とともに土師器の廃棄場所として穿たれたものだろうか。

### 3. 遺物

今次の発掘調査によって出土した遺物は、プラスチック製コンテナバット約50箱分にのぼる。その大多数は瓦類が占めているが、他に土師器（3箱）を初めとして、須恵器、鉄製品、古錢等が出土している。これらの遺物は、殆んどが2次堆積によるものであり、そのまま遺構と結びつけて考えるわけにはいかないのが実状であるが、一つの傾向としての位置づけは可能であるように思う。ここでは、これらのことについて遺物を、(1)瓦類、(2)土器・陶器類、(3)古錢、(4)鉄製品その他の4項目にわけて記述することとしたい。

#### (1) 瓦類

##### a 軒丸瓦

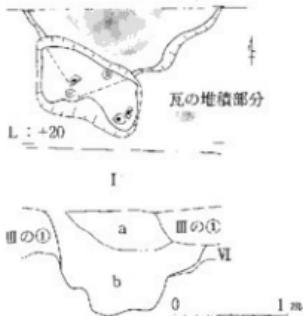
軒丸瓦は、意匠文様から5種類にわけられるが、全てが第6次調査までに発見されていたものであり、新知見のものは出土していない。軒平瓦については唐草文意匠を有するものに比較的残りのよいものが出土しており、この中には国分寺出土の軒平瓦と同一意匠をもつものも含まれている。

素弁八葉 №1～№3　複弁七葉 №4～№6　隆起線 №7

単弁六葉 №8　単弁四葉 №9　変形複弁七葉 №10

№1（挿図9-1）

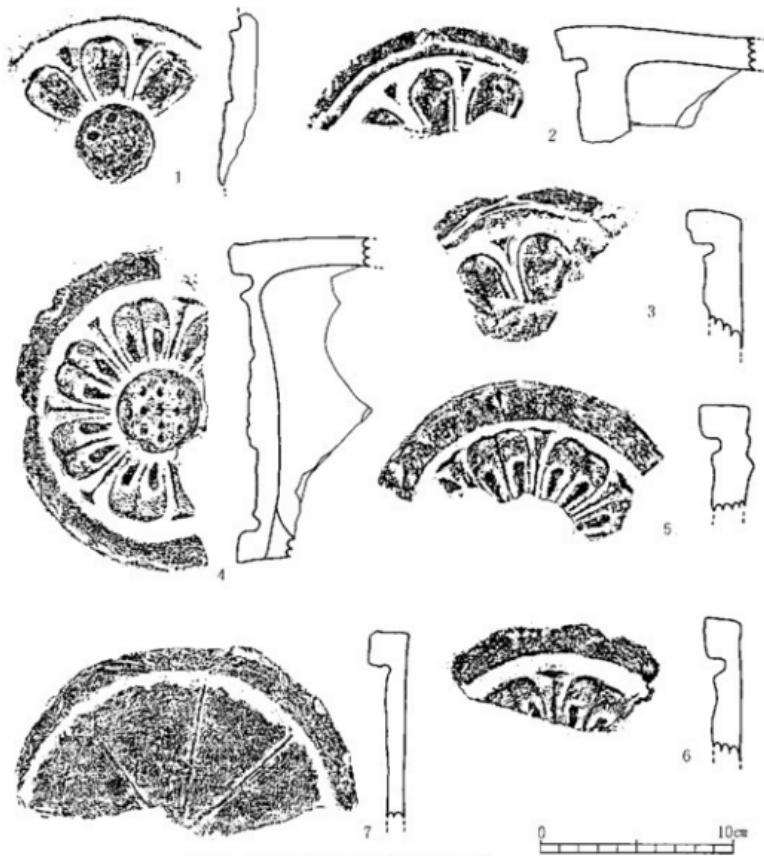
周縁部が全て剥離し、内区も3分の1ほどを残すのみである。花弁は弁長3.7cm、弁幅2.6cmを測り、中央に稜をつけて、花弁端は円形に反転する。間弁は楔形をなし、大きく盛りあがりを見せており、中房は1+6の蓮子配置であり、径4.2cmである。「離れ砂」の使用が見られるが、焼成は良好で、胎土中には多量の黒色粒子が含まれる。C区出土。



a. C軽石、ロームブロックを含む黒色土。

b. ロームブロック（約2～3cm）を主体とする黒色土、C軽石をわずかに含む。

挿図8 ピット平面および地層断面図



挿図9 軒丸瓦拓および断面実測図(1)

N.2 (挿図9-2, 図版3-1)

周縁は2段に作られており、高さ1.1cmを測る。所謂素文の直立高縁である。弁幅は2.7cmを測るが、全体に影りが深く厚い肉置が見られる。花弁の周囲は界線（幅0.2cm前後）によって明瞭に区切られる。平瓦凸面は縱方向のナデによって調整されており、瓦当裏面には不定方向のナデが施される。また、周縁部外周には端面から0.5cm前後の幅で面取りが見られる。焼成堅牢。D区Ⅲ層中より出土。

N.3 (挿図9-3, 図版3-2)

弁幅2.8cm、周縁高1cm、周縁幅1.6cmを測る。周縁部には範の二度押ししが見られ、胎土中には石英粒が比較的多く含まれる。焼成は良好で、色調は灰色を呈す。D区より出土。

#### N<sub>4</sub> (挿図9—4, 図版3—4)

瓦当の半分あまりを残す。全体に流麗な内置が見られ、内区を中心として「離れ砂」の使用痕が残る。2種の胎上が混ぜ合わせてあり、赤褐色鉱物(0.2~0.4cm)を特徴的に含む。丸瓦との接合は接着法によったものであり、接合部を中心として丁寧にナデ整形されている。凸面は瓦当面より4cmが横ナデ整形で、それ以外は縦ナデが施されている。色調は断面は赤褐色を、表面は煉瓦により黒灰色を呈する。焼成堅牢。D区Ⅲ層中より出土・なお、各部の計測値は次のとおりである。

花弁長 3.6cm	中房径 4.4cm	周縁高 0.9cm
子葉長 2.1cm	中房厚 0.3cm	周縁幅 1.6cm
介 幅 3.1cm	蓮 子 (1+4+8)	復元径 16.5cm

#### N<sub>5</sub> (挿図9—5)

瓦当において箇割れの痕跡が認められる他、花弁の長さに対して子葉が比較的短く、全体的に狭長な印象をうける。周縁は素文、直立高縁で、外周には横ナデ整形、瓦当裏面には不定方向のナデ整形が施される。胎土中には砂の多量の混入が見られるが、焼成は良好で、全体に自然釉が付着する。D区Ⅱ層中より出土。

#### N<sub>6</sub> (挿図9—6, 図版3—9)

全体の彫りは浅く、またN<sub>5</sub>と同様、箇割れ痕をもつ。丸底(厚さ1.2cm)との接合は接着法によったものと見られる。焼成は良好で、赤褐色を呈する。胎土中に赤褐色鉱物を多量に含むことを特徴とする。D区Ⅲ層上面より出土。

#### N<sub>7</sub> (挿図9—7)

弁区を中心として粘土鐵が見られる。周縁は素文、直立高縁であり、外周部には横ナデ整形が施されるが、瓦当裏面には雜な不定方向のナデが見られるだけである。瓦当は中心部で0.9cmと非常に薄い。胎土中には2種の陶土の混入が見られる。D区Ⅲ層中より出土。

#### 各部計測値

周縁高 1.1cm	内区径 15.4cm
周縁幅 0.8~1.6cm	中心角 44度

#### N<sub>8</sub> (挿図10—1, 図版3—10)

花弁、子葉及び界線は全て0.2cm前後の隆起線によって表現されているが、一本の連続した線ではなく、瓦当に不連続部が認められる。周縁の幅は一定ではなく、0.8cm~1.5cmと不規則であり、幾分外傾化する。瓦当の厚さは中央部で厚く(1.8cm)、周辺に向かうに従って薄く(1.2cm)なる傾向にある。瓦当裏面及び凸帯裏面には連続した布目痕が乱れながらも残っている。色調は黒灰色をおび、焼成堅牢で胎土中に比較的量の石英を含む。推定復元径17cm。D区Ⅲ層中より出土。

#### N<sub>9</sub> (挿図10—2, 図版3—11)

N<sub>8</sub>と同じく、各部の表現は隆起線により、花弁はT字状に、子葉はクロス状に表現されている。周縁は素文、直立低縁であるが、幾分外傾化する傾向をもつ。周縁部には粘土割れが見られ、胎土中には多量の石英粒が含まれている。瓦当裏面には布目痕を残し、焼成良好で黒色を呈す。D区Ⅲ層中より出土。



插図10 軒丸瓦拓影および断面実測図(2)

各部計測値

花弁長	3 cm	子葉長	1.5 cm	弁幅	2.2 cm
周縁高	0.3 cm	周縁幅	1.9 cm		

N.10 (插図10—3, 図版3—12)

蓮子文のかなり抽象化された意匠であるが、鳥の足跡状に3本の太い隆起線によって花弁と子葉を表現し、花弁と花弁の中間に同じく1本の隆起線によって間弁を表現している。全体に丁寧な作りであって、力強い印象をうける。2割弱の残存状況であるが、外周より1.4cmのところに高さ0.7cm、幅1cmの凸帯周縁をめぐらし、さらに3.3cmのところに高さ0.5cm、幅0.8cmの幾分細身の凸帯をめぐらすことを特徴とする。A区Ⅱ層中より出土。

以上、今次出土した軒丸瓦の主なものを記してきたが、軒丸瓦総数は小破片も入れると24点になる。全体の傾向を見るためにこれらの軒丸瓦を意匠文様と出土地から区分すると次のようになる。

意匠文様	出土数	内訳					
		A区	B区	C区	D区	E区	F区
素弁八葉	3点		点	点	1点	2点	点
複弁七葉	14	5			3	4	
隆起線	3				2	1	
单弁六葉	2				1	1	
单弁四葉	1				1		
変形複弁七葉	1	1					

總出土数における複弁七葉軒丸瓦は24点中14点にものぼり、これが塔塔の主要瓦、創建瓦であることを裏づける。また、出土地から見るとA区(塔跡関係)、D区(金堂跡関係)から均等に出土していることがわかる。さらに、素弁八葉軒丸瓦は3点のみの出土であつたが、C区、D区と金堂跡関係のトレンチのみより発見されていることからプライマリーな出土状態ではないにしろ、興味がもたれるところである。

## b 軒平瓦

No.1 (挿図11-1) E区6トレンチⅢ層中出土。

三重弧文の一部。段顎形式。瓦当の厚さは5.3cm、顎の深さは10.2cm、顎の造り出しの厚みは2.2cmである。凸面には瓦当から1.3cmのところに高さ0.6cm、幅0.9cmの突帯をつける。弧の断面は、梢円の半円を呈し、溝幅狭く深い。自然釉の付着があり、輝石、石英の粒子を含む灰黒色の胎土で焼成は良好である。

No.2 (挿図11-2) A区2トレンチⅢ層中出土。

三重弧文の一部。無顎形式。瓦当の厚さは3.2cmで、凸面に数多くの「百・千・万」のヘラ描き文字をもつ、弧線断面はゆるやかな梢円を呈し、溝も浅くゆるい曲線を描く。雲母、石英微粒子を含む青灰色の胎土で焼成良好。

No.3 (挿図11-3) D区3トレンチⅠ層中出土。

三重弧文の一部。無顎形式。瓦当の厚さ2.5cm。弧の断面は三角形状で、溝の断面も逆三角形状を呈す。ヘラ調成で、側面は平らに成形されている。雲母、石英、小石粒子を含む灰黒色の胎土で焼成良好。

No.4 (挿図11-4、図版4-4) E区6トレンチⅡ層中出土。

唐草文軒平瓦の一部。段顎形式。瓦当の厚さは8cm、顎の深さは6.5cm、顎の造り出し厚みは4.2cmである。瓦当面に形押しで二重凸線の外区を、内区には凸線左扁行唐草を表現している。石英を含む灰茶色の胎土で焼成良好。

No.5 (挿図11-5) E区4トレンチⅡ層中出土。

三重弧文の一部。瓦当の厚さは2.5cmで、弧は型押しによる整形である。凸面は横ナギ整形。灰茶色の胎土で焼成良好。

No.6 (挿図11-6) E区6トレンチⅡ層中出土。

唐草文軒平瓦の一部。段顎形式。瓦当の厚さは6cmで、顎の高さは4cm、顎の造り出し厚みは2.6cmを測る。瓦当面に型押しで二重凸線の外区をつくり、内区には凸線均正唐草を表現してある。石英の微粒子を含む灰色の胎土で焼成良好。

No.7 (挿図11-7) A区1トレンチⅡ層中出土。

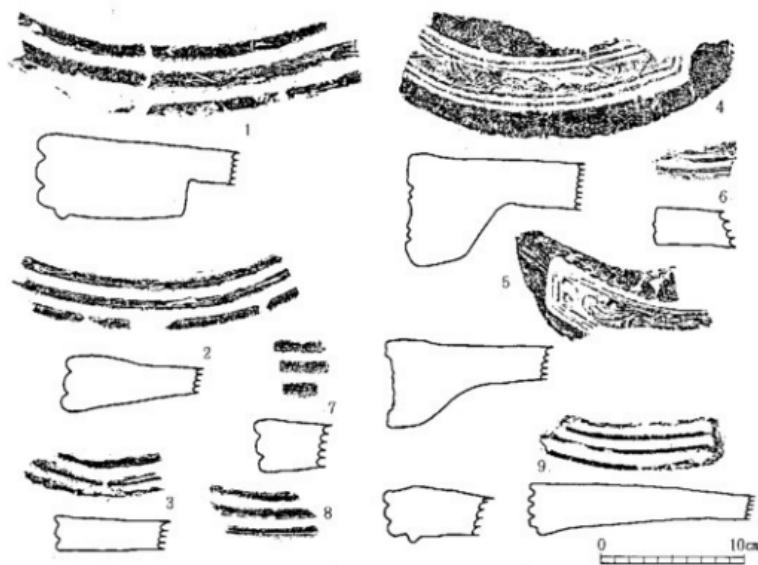
三重弧文の一部。無顎形式。弧線は断面に丸朱があり、溝の断面が深いU字形を呈す。文武質の小石粒子と雲母を含む青灰茶色の胎土で焼成良好堅牢。表面に自然釉の付着あり。

No.8 (挿図11-8) E区6トレンチⅡ層中出土。

三重弧文の一部。段顎形式。瓦当より1.3cmに突帯あり、弧線はなだらかな半円の山形、溝は幅広く浅い。石英と小石粒子を含んだ灰白色の胎土で焼成良好。

No.9 (挿図11-9) E区6トレンチⅡ層中出土。

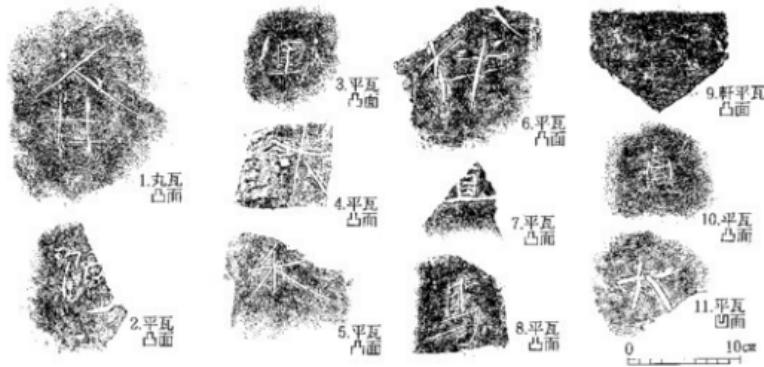
四重弧文の一部。瓦当の厚さは3.1cm。弧の断面は山形で、半丸の凸面に粘土を付け加えて瓦当の厚みを出し、軒面より1.5cmの部分に突帯一本をつけている。石英輝石を含む青灰色の胎土で、焼成は堅牢。



挿図11 軒平瓦拓影および断面実測図

### c 文字瓦

今次の発掘調査で発見された文字瓦は17個体におよぶが、そのうち判読可能なものは次に掲げる10個体のみである。

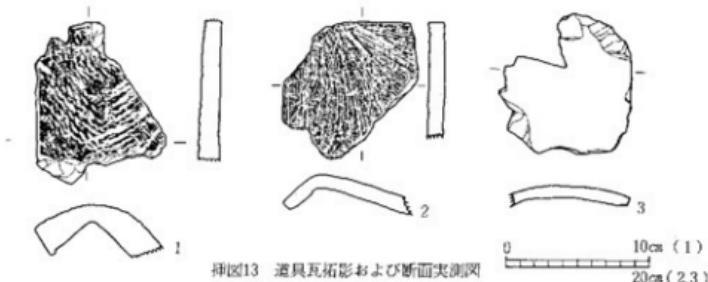


挿図12 文字瓦拓影図

これらのうち、「馬」「道」「人井」「八件」(?)は新知見である。また、No.9は軒平瓦凸面側に「百」「千」「万」等の文字が先の割れた工具によって、10個所程書かれており、既出土例とは異なった様相を呈している。

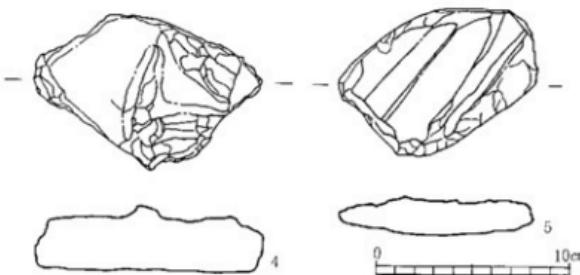
### d 道具瓦(挿図 13, 14)

1, 2とも用途は不明であるが、道具瓦の一種と考えられる。1は外面に纏叩きが施されており内面角度がほぼ直角をとるのに対して、外面は緩やかな曲線を描く。2の外面、内面には粘土板系切り痕が明瞭に残っており、内面、外面ともほぼ同じ角度で鈍く曲がる。3は平瓦加工の面戸瓦である。均質な胎土をヘラ状工具によってきれいに面取りした痕跡を看取することができる。



挿図13 道具瓦拓影および断面実測図

その他、鶴尾の残片(5)と思われる瓦が出土している。5cm×10cm程度の破片にすぎないが、表面には太さ3mmの突帯が2本平行して走っており、さらにこれが両方向に続く傾向があることから、鶴尾の筋の部分に相当するものであろうか。4は表面に幅1.5cmの彎曲した溝帶が長さ5cmにわたって走り、裏面には平滑にナデられた痕跡を見ることができる。5に比べて2.5cmと厚くまた均一化していることから鬼瓦片とも考えられる。



挿図14 道具瓦実測図

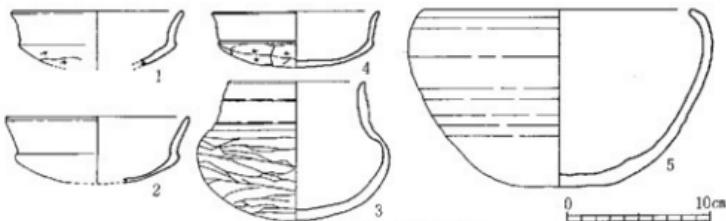
### (2) 土器・陶器類

今次の調査によって出土した土器、陶器類は、調査面積が狭小だったのにもかかわらず、夥しい量に達している。出土状況は一様ではなく、E区に殆んど集中しており、しかも完形品や墨書き器が多いことを特徴とする。ここでは、出土状況から堅穴住居跡内より出土したものと、E区の瓦溜まり状ビットより出土したものに大別し、器形のはっきりしている土器を中心に記述していくことにする。

### a 壺穴住居跡挿図(15—1~5)

前述のとおり、今次の調査で合計5軒の壺穴住居跡を検出、確認することができた。住居跡間相瓦の重複関係は見られなかったが、29号住居跡は塔跡に先行し、31号住居跡は瓦溜まり状ピットに先行することが地層断面より判明している。

壺穴住居跡より出土した上器で器形を推定できるものは5個体にすぎなかった。このような中で1の土師器杯は29号住居跡の南側周溝近くより出土したものである。推定口径12cmの丸底の杯であり、稜を持って口縁部は大きく外反する。2の土師器杯は3の小型壺とともに30号住居跡より出土したものである。2は床面直上において発見されたものであり、比較的強い稜を持って直線的に立ち上がる。体部にはヘラ削りが施されていると思われるが、摩耗が著しくヘラ痕ははっきりとらえられない。3は埋土中の出土ながらも口唇部をわずかに欠くのみでほぼ完形に等しい。肩部に2箇所、口縁部に1箇所弱い段をもち、内傾気味に立ちあがる。体部は横方向のヘラ削りが施されるとともに、二次焼成の痕跡をとどめている。丸底の底部には直径10cmにわたって煤の付着が見られる。4、5は31号住居跡より出土している。4の土師器杯も1、2と同じく稜を有し、口唇部で外反する傾向をもつ。5は須恵器の鉢であり、水びき成形痕を残す。底部には回転糸切り痕をとめる他、周辺部にはヘラ調整が施されている。平底の底部から内傾気味に立ちあがり、肩部で強く角度を変える。床面近くからの出土であるが、他遺構から流れ込んだものと思われる、なお、32号住居跡、33号住居跡からは復元不可能ながら、体部下半を縱にヘラ削りされた土師器甕が出土している。

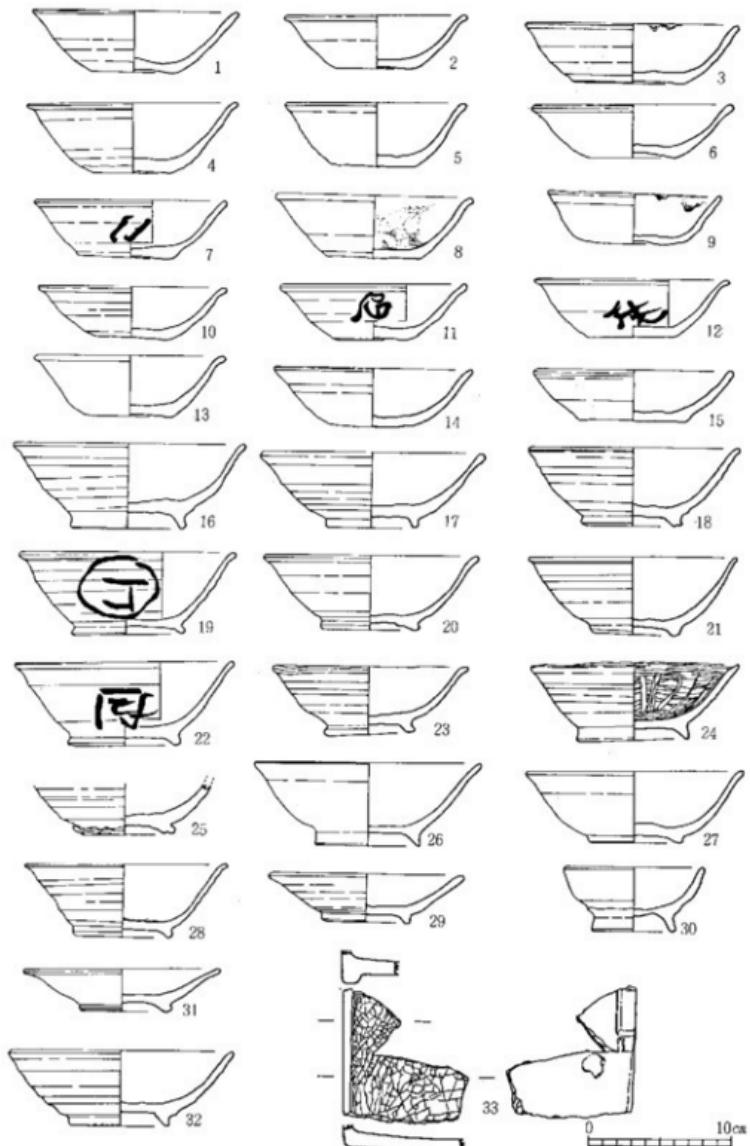


挿図15 壺穴住居跡出土土器実測図

### b 瓦溜まり状ピット(挿図16)

瓦溜まり状ピットからは、瓦に混じって多量の土器が出土している。完形あるいは完形に近いものだけでも60個体近くを数えることができるが、その9割強を粗製の上器杯が占めており、興味がもたらされた。以下、瓦溜まり状ピット出土土器の観察結果を掲げるものとする。

1~15は底部に回転糸切り痕を残す須恵器杯である。これらは全てロクロ右回転による成形であり、体部を中心としてロクロ目を見ることができる。純然たる灰白色を呈する。所謂翫元炎焼成のものは少なく、その多くが灰褐色、暗褐色に焼き上げられたものである。体部は全般的に幾分内傾気味に立ちあがる傾向をもち、口唇部にいたって反りかえるという特徴を有する。これら須恵器杯のうち3、7、11、12は墨書きが見られる。3は内面底部にその他は外面体部に墨書きがかかっていることがわかるが、いずれも一字記入とのみ判断されるだけで、判読は不可能である。また、3、8



補図16 ピット内出土土器実測図

の内面には多量の油煙付着が認められる。特に、8は油煙の付着がほぼ内面全体におよんでおり、しかも厚く残ることから、かなり長い期間にわたって灯明具として使用されていたものと推定される。

16~32は高台付の須恵器碗および皿である。須恵器杯と同じく、還元炎焼成で焼かれたものはわずか3個体にすぎない(16, 28, 32)。焼成といい、成形といい粗製乱造を極端に思わせるものである。18は右回転によるロクロ成形であり、底部には糸切り痕を残す。体部には粘土の乱れが見られるが、高台部の接着等比較的丁寧に作られている部分もある。高台部は2段になるが、内面の1段低い部分はロクロ回転による削りによるものである。内面、外面とも淡褐色を呈するが、部分的に赤褐色、黒色部が見られる。24はややゆがみが認められるが、内面全体にわたって横方向と放射状の研磨が施されており、特異な存在である。25は粗製の代表的なもので、高台部を中心にして粗さが目立つ。体部成形はロクロ回転によるものと思われるが、ロクロ目が通っておらず、いたるところで粘土の乱れが取られる。高台は輪高台であり、接着における調整も殆んど行われていない。特に高台端部は棒状工具による押えが幾重にも残っており、不安定な印象を受ける。体部、底部等全体に厚手に作られ、重苦しく感じられる。須恵器杯に見られたのと同様に高台付碗でも油煙の付着しているものを見ることができる(28, 30)。

特に30は内面および底部に油煙が多量に付着し酸化炎焼成を思わせるものであり胎土、色調も灯明皿に近似している。

33は今次の調査によって出土した唯一の陶器である。高台付皿であり、器面内側には淡緑色の釉がかかっている。ほぼ1cm単位の太い貫入に混じて、これを溝に連絡する形で細かな貫入が無数に入る。胎土は均質であるが、夾雜物を多量に含んでいる。

### (3) 古銭(挿図17)



挿図17 古銭拓影図 (1/1)

A区より9枚の古銭が出土した。塔跡の周縁を取り巻く白色粘土面(玉石層)下の土壤中よりまとまって発見されたものである。比較的残存状態が良く、銭文の判読から隆平永寶(初銅・延暦15年)と富壽神寶(初銅・弘仁9年)の2種類が確認された。各々の古銭の法量は次のとおりである。

しかし、詳細に観察してみると、隆平永寶、富壽神寶とも同一意匠でありながら、細部についてはそれぞれ若干の差異があることに気づく。隆平永寶の2個体を比較すると、「平」の字が資料1は大ぶりで重心が下にあるのに対して、資料2は細く小ぶりで重心も上方にあることを指摘できる。また、外縁も資料1の1mmにに対して、資料2は広く2mmを測る。これは所謂、「小様小字」「細字」の2種類があったことに由来するものであろう。

同様に、富壽神寶について観察すると、「富」のウカソムリが資料3では丸みを持つのに対して、資料4や資料5では角ばった印象をうける。先に見た隆平永寶の様に、外縁の広・狭や字の作り方

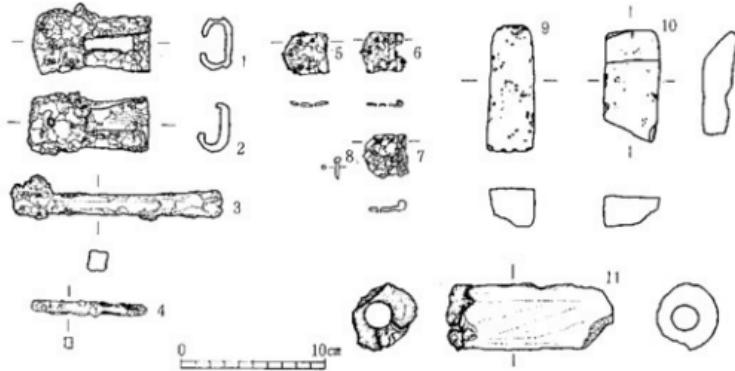
に極端な差は認められないが、重量に約1gの差を認めることが出来る。これは「広縁」「小様」の2種類に分類されるものである。

番号	插図 図版	名 称	縦外径 (mm)	重 量 (g)	番号	插図 図版	名 称	縦外径 (mm)	重 量 (g)
1	17-1 6-1	陸平永寶・小様小字	24.0	2.3	6	6-7	富壽神寶・(小様カ)	23.5	不 明
2	17-2 6-2	〃・細字	25.5	3.05	7	6-3	〃	23.5	不 明
3	17-3 6-4	富壽神寶・広 縁	23.2	3.2	8	6-8	〃	21.5(+α)	不 明
4	17-4 6-5	〃・小 様	23.5	2.3	9	6-9	〃	不 明	1.9(+α)
5	17-5 6-6	〃・小 様	23.5	2.2					

表 古 銭 一 輩

(4) 鉄製品・その他（挿図18）

鉄製斧は、E区第5トレンチⅡ層中（挿図18-1）とE区第6トレンチⅡ層中（挿図18-2）から出土した。鉄釘は、E区第6トレンチⅡ層中（挿図18-3）とD区第5トレンチⅢ層中（挿図18-4）から出土した。鉄製環番は、E区第6トレンチⅡ層中（挿図18-5, 6, 7）から出土し、（挿図18-8）は蝶番に付着していた丸釘である。砥石は、D区第2トレンチⅠ層中（挿図18-9）と同トレンチⅡ層中（挿図18-10）から出土した。櫛の羽口は、E区第6トレンチⅢ層中（挿図18-11）から出土した。



挿図18 鉄製品、その他実測図

### III 考 察

#### 1. 山王庵寺跡出土軒丸、軒平瓦について

今次の調査によって、新たに2種の軒平瓦の追加を見た。これで発掘調査に伴って出土した軒丸は軒丸瓦13種、軒平瓦11種となったわけである。軒丸瓦については、第6次調査報告書に大旨記されているので、ここでは第7次調査までの軒平瓦について考察を加えてみたい。

軒平瓦は今までに大別して、索文、二重弧文、三重弧文、四重弧文、唐草文、鋸齒状文、綾杉状文の6種類が発見されているが、索文、二重弧文、三重弧文、四重弧文は同系統に属するものであり、文様軒平瓦も鋸齒状文1個体、綾杉状文1個体という出土量からすると、唐草文に集約されて考えられるものである。

##### (1) 索 文

段顎形式と無顎形式に大別される。調整は段顎、無顎形式とも大差なく、全てが桶巻作りによったものと推定される。段顎形式になるものは顎の深さが6.5cm前後に集中する傾向があるのに対して、瓦当面の厚さには均一性が見られない。胎土は石英・雲母を多量に含んだ均質なもので、c胎土に属する。

##### (2) 二重弧文

第3次調査で1個体のみ確認されている。粗雑な作りであり、瓦当面にも粘土の乱れ等が看取されることから後出的なものと考えられる。

##### (3) 三重弧文

最も多く出土した軒平瓦であり、堂塔使用瓦の主要部分を為したことは推定に難くない。これは顎の有無、突帯の有無から4つに大別されるが、有顎、無突帯のものは全く見られず、殆んどの三重弧文が無顎、無突帯である。

###### ○ 有顎、有突帯

瓦当の厚さは5.1cm前後、顎の深さは9cm前後に集中するが、個々に観察すると調整等に差異が認められる。3個体確認されるが、全てに模骨痕を留める。

###### ○ 無顎、有突帯

第5次調査で顎の有無不明なものに突帯のあるものが出土しているが、無顎になると推定されるので、ここでは一応無顎、有突帯として整理しておく。1個体のみ出土。

###### ○ 無顎、無突帯

殆んどの三重弧文がこれに含まれる。約半数のものに模骨痕が認められるが、模骨痕を残すものと、そうでないものとの間に調整等の差異は認められない。断面は半円形をなすもの、橢円形をなすもの、山形をなすものなど詳細に観察すると、6種ぐらいに別れるようである。胎土はcとdに属するものが殆んどであるが、これに若干a、b胎土のものが含まれる。特にb胎土の三重弧文は平瓦凸面にのみ最少限の粘土の補てんを行ったものであり、この中には瓦当面から3~4cm幅に横方向の縦目痕が、その他の部分には縱方向の縦目痕が残るものがある。こ

れは焼成も甘く、凹面側のナデが殆んど見られないこと、および瓦当面のロクロ挽きのあとも不揃いで荒れていることから、三重弧文のうちでも最も時期の下るものと見ることができる。

#### (4) 四重弧文

8個体の出土を見たが、これは額の有無を問わず、全て突沿を有している。有額のものはこの内2個体であるが、額が11cmと、素文、三重弧文等に比べて非常に深く、しかも瓦当面が薄いという特徴を有する。瓦当の断面形は、大旨端正な半円形の巻り返しである。全てa胎土に属する。

#### (5) 唐草文、綾杉状文、鋸齒状文

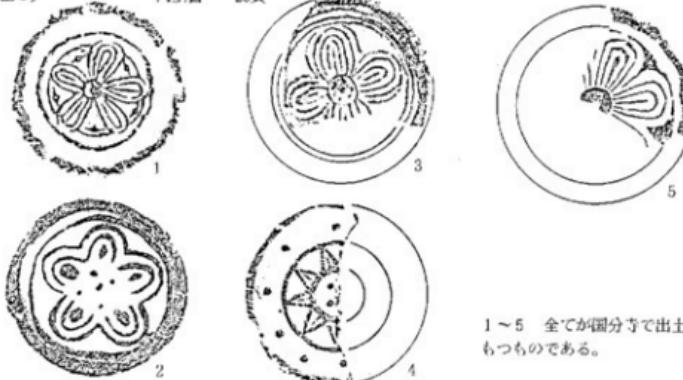
綾杉状文、鋸齒状文の各1個体が確認されている他は全て唐草文である。綾杉、鋸齒状文ともb胎土に属し、国分寺に同範例をもつ。唐草文は8個体が確認されているが、全て二重界線によって外区と内区に区切られるという特徴を有し、藤岡瓦窯址との関連が指摘される。その内3個体は国分寺で伴出例のある雲型を思わせた均整唐草文である(挿図11)が、そこには唐草文意匠の退化や範型の荒れの過程をたどることができ、これは同時に胎土から見たときのa胎土からb胎土の変化に対応しているということができる。

軒丸瓦については前述のとおり、発掘調査によって13種の意匠文様が確認されているが、この他にも山王庵寺出土とされる軒丸瓦があるので、参考例として掲げておく。これらは全て国分寺に出土例があるのであり、発掘調査によって出土しない程度の量であったことを考え合わせると、補修用瓦として使用されたものと思われる。特に、4は八重巻窓跡(秋間古窓跡群)に伴出例があり、複弁七葉軒丸瓦を中心とした山王庵寺創建瓦の供給窯としての性格から、国分寺、山王庵寺補修瓦の供給窯としての性格への転換を考える上で興味深い資料である。また、其伴例から山王庵寺使用瓦の供給窯として前述した八重巻窓跡の他に、国分寺創建瓦のややだれた意匠である重弁五葉軒丸瓦を伴出する風呂ヶ谷窓跡(藤岡古窓跡群)、四面に竈目状の凹痕を留める平丸を伴出する守尾窓跡(乘附古窓跡群)等をあげることができよう。

(注1) 山王庵寺跡第6次発掘調査報告書(前橋市教育委員会 1980) 23頁

(注2)

同上書 26頁



1～5 全てが国分寺で出土例をもつものである。

挿図19 山王庵寺跡出土軒丸瓦(参考)

## 2. 塔使用瓦について

平瓦については大きく模骨痕を有するものと、そうでないものとに分類し、詳細な観察を試みた。観察視点は、外面調整、側面成形、胎土、色調、焼成、布目（ $1\text{cm}$ 中）、厚さ等であり、気づいたことを適時補足した。なお第6次調査によって、塔心礎から西へ $8\text{m}$ から $12\text{m}$ の範囲には塔崩壊時にそのまま堆積したと思われる瓦が存在したので、これを観察素材として設定した。

模骨痕を有する平瓦、言い換れば桶巻作りと推定される平瓦は全平瓦78個体中、22個体を数える。これは胎土の違いによって2分される。**1**は緻密な粒子を基調とするもの（以下、**c**胎土と呼ぶ）で、石英を含むもの、雲母を含むもの、酸化鉄鉱物を含むもの、さらにこれらを複合的に含む（注1）もの等から3ないし4通りの細分が可能である。また**2**は焼きあがりが白色粘土と灰黑色土の構の差となって現われるもの（**d**胎土）であり、この中には砂質分の混ぜ合わせを想わせるものが含まれる。凹面の布目痕は $1\text{cm}$ 中8、9本に集中する傾向があり、稀に11本、13本を数えるものがあった。特に、この期の瓦の特徴として、経糸と縦糸の太さが異なること（縦糸の太さが経糸の2倍近くあるものを指摘できる）があげられよう。凸面は殆んどが横ナゲで処理されているが、3個体については、深い運叩きを見る。円筒截断面は一面の切り離しが多く、補助的に凹面側にヘラ削りが施される。

尚、模骨の形状については枠板の圧痕がじかに凹面に残っていたものがあり（挿図20—7），その観察から枠板は同一模骨で幅 $1.5\text{cm}$ と $1.8\text{cm}$ の2種類あったことがわかる。これから推定される模骨の直徑は $44\text{cm}$ であり、枠板を $78\sim80$ 枚程度使用していたものと思われる。また、模骨の様相については枠板が広端面から $8.5\text{cm}$ 程見え、不規則に段違いとなって高低差を生じており、ここに枠板を連続したであろう細跡が確認されないことから、おそらく我が国古代における諸例と同じく、枠板の一側面から他側面へ貫通孔を穿ち、これに紐を通して連絡するという方法をとったものであろうと思われる。枠板の幅は布目を通してみた模骨痕にしても、ほぼ同様の計測値（ $1.8\text{cm}$ ）を得ているが、他に $3\text{cm}$ 前後の大きめの計測値を示すものがあり、ここに2種類の模骨の存在を指摘できる。

78個体中、残りの56個体は一枚作りに関するものである。胎土は桶巻作りの項で既述した2種の粘土の混ぜ合わせの見られるもの（**d**胎土）を含めて、大きく3分類される。残りの2種類は黒色粒子を多量に含む均質な胎土（**b**胎土）と、比較的大きめな石英を含む粒子の粗い胎土（**a**胎土）である。**b**胎土は黒色粒子に混じって酸化鉄鉱物を含むものと、そうでないものに細分され、**a**胎土は粘土の混ぜ合わせが見られるものが微量にある他は、1種類として包括されるものである。ここで、2種の粘土の混ぜ合わせが見られる胎土（**d**胎土）には桶巻作りと一枚作りの両者が存在するわけであるが、これを除く**a**胎土、**b**胎土については桶巻作りの可能性をもつものがないことから、一応、この2種の胎土の混ぜ合わせが見られる時期を持って、桶巻作りから一枚作りへ移行すると見てよいであろう。**a**胎土の平瓦は布目痕（ $1\text{cm}$ ）が6、7、8、9本に集中する。桶巻作りの平瓦とは異なって、経糸・縦糸が同数か、あるいはそれに近いものが多く、特に6本×6本、9本×9本にそれが顕著である。外面調整は、最終段階の工程においては叩き目の残るものは全く見

られず、殆んどの個体に縱、ないし不定方向のナデが施されている。側面成形は三面にヘラ削りしたものと、一面のものとがほぼ同比率で存在する。b胎土の平瓦は布目痕（1cm）が7~11本と比較的幅広い範囲で残り、強い集中化を示すとは言えない。しかし a胎土の平瓦はほど顕著ではないが、経糸と縦糸が同じか、それに近いものが全体の4分の3を占めており、8本×8本と9本×9本に同本数の例を多く見ることができる。b胎土の平瓦は特に外面の調整法に特徴を示す。a, c, dの胎土瓦と同じく、最終段階外面に横ナデ、縦ナデ等によるナデ調整が見られることに変りはないが、この他に繩目（叩き）、格子目叩き、平行状叩きの各痕跡を見ることができる。特に繩目（叩き）痕は、c胎土の平瓦が深い压痕の繩目痕を残すのに対して、側面に平行した繩目痕と、これに直行した幅5cm程度の繩目痕を同時に残すものである。從来この繩目痕については繩目がローラー（転がし）によったものか、叩きによったものか意見が別れている。

（注1）

挿図20—3は比較的残りが良く、繩目痕を明瞭に留めている好資料であるが、側面に平行する繩目痕の末端部に、2箇所連続して大きな繩目単位が続くことが看取できる。これは、ほぼ同列に左右にも見られるが、このような繩目痕の残り方はローラーによるものとは埋説しがたい。また、端面に平行して走る繩目部分が、横5cm、縦2cmの幅で残っているのが見られるが、これは端面平行繩目施工後、側面に平行して叩いたために残った「しま」であろうと思われ、これが側面平行繩目痕が叩きによるものであることを裏づけるものである。また、これは同時に、端面平行繩目痕が側面平行繩目痕に先行することも物語っている。ただ、端面平行繩目痕については、側面から側面まで繩の条痕が通っており、彎曲した瓦面からすると、叩きによったものとは考え難い。また、一方の側面にはローラーの回転に伴って端末に粘土のわずかな隆起が見られることから、端面平行繩目痕はローラーによったと見ることができよう。

丸瓦は36個体を観察の素材とした。半丸の78個体に対して、2分の1弱にすぎないが、これが塔崩壊時の瓦の堆積であったことを考えると、ほぼ妥当な比率であるといえる。丸瓦ではc胎土をもったものは全く見られず、36個体中23個体がb胎土に集中していた。厚さは3.6cmを測るものが一片見られた他は、1.4cm, 2cmを中心としてまとまる傾向にある。全ての丸瓦にナデが施されているが、胎土の違いによって若干の差が認められるようである。すなわち、a胎土の丸瓦は12個体中8個体までが縱方向のナデであり、残り4個体は縱方向のヘラ削りと横方向のナデである。これに対して、b胎土の丸瓦は23個体中15個体が横ナデであり、5個体が繩叩き（縦方向）後、横ナデ、残り3個体が縦ナデによって処理されている。ここでは、a胎土の丸瓦が縦方向のナデを意識し、b胎土の丸瓦が横方向のナデを意識していることが指摘できよう。特に、横ナデにおいては端面に平行する沈線を數条確認することができ、回転台の使用による調整を推定することができる。また、丸瓦のa胎土、b胎土における縦方向、横方向の意識は、平瓦のa胎土、b胎土においても同様であることは平丸の項で既述のとおりである。

以上、平瓦について、補巻作りと1枚作りの違い、および胎土の違いから、丸瓦についても胎土の違いから、それぞれの特徴について記してきたが、これらのことをもとに胎土から前後関係を把握するならば、一応、c胎土→d胎土→a胎土→b胎土という変遷がたどれるであろう。また、b胎土に属する平丸、丸瓦の出十が全体の半数近くを占めることから、この時期に塔程物使用瓦の大規

模な葺き替えがあったものと想像される。

(注1) 佐原 真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌58-2』

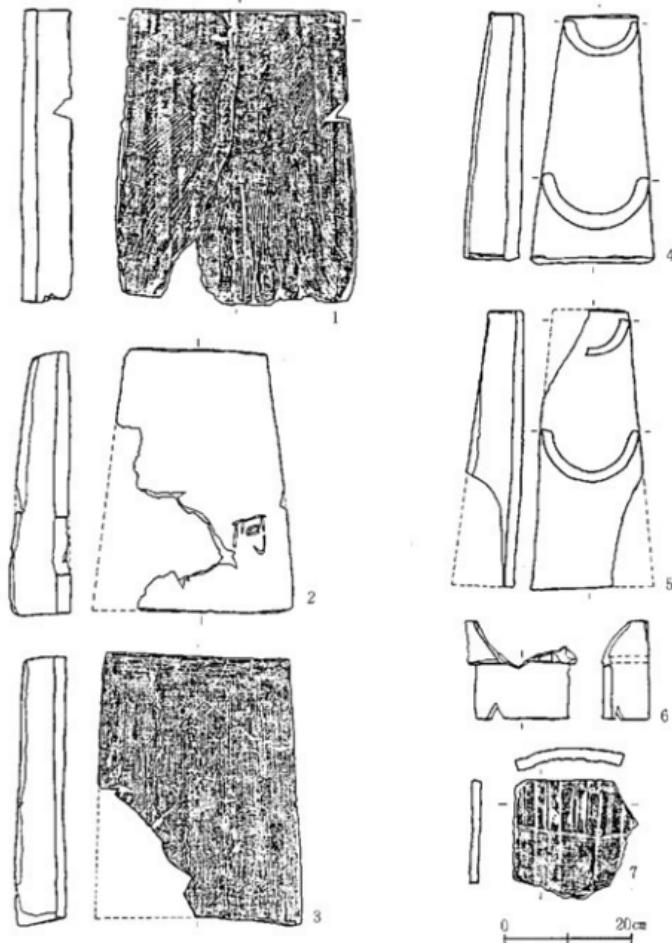


図20 平瓦、丸瓦拓影および断面実測図

## IV 結 語

### (1)

山王庵寺跡の発掘調査は昭和49年度に始まり、今年度で7次を迎えるに至った。その間、3間9間の僧房、ないし食堂と推定される掘立柱建物跡、「礎石群B」と命名された、礎石を伴う建物跡、および金堂と推定される基壇建物跡等が確認されてきている。これらは直接寺院に関係する建物跡と推定されるものであるが、この他に時期の異なると思われる掘立柱建物跡や堅穴住居跡も多数検出されており、間接的ながらも寺院の存続期間や寺域を判定するための資料を提供している。特に、「礎石群B」の西で確認された掘立柱建物跡は寺院に先行した可能性を持つものであり、寺院創建以前の土地利用を考える上で貴重な資料である。しかしながら、寺院中心部の様相については、第6次発掘調査で金堂跡が検出されたものの、その西限は未確認であり、また塔跡についても基壇の一辺長が17.2m以内におさまるということが大旨把めただけで、具体的な基壇の様相については詳らかにされていないのが実状であった。

そこで、本年度はこれらの遺構の細部の確認を主眼とし、これに付随して金堂跡の南側、および推定寺域南東部での遺構の検出を目的として発掘調査を行った。したがって調査区域は多岐に涉り、また建物の空閑地を複数の調査で行ったため、これまでの調査で採ってきた4m×4mのグリッドを設定しての調査は行うことができず、調査区域において適宜、グリッド（トレンチ）を設定していった。

また、調査期間も10月1日から11月14日までと、例年とは大きく異なったため、高校生・大学生の協力を得ることができず、地元の方々の尽力によることが大きかった。地権者の都丸甲子郎、阿久津利雄、阿久津貞雄、阿久津静治各氏、および山王地区自治会に感謝の意を表したい。

### (2)

本年度の発掘調査の概要については次のとおりである。

#### ①塔跡

塔基壇の一辺長は14mであったことが判明した。また、基壇は塔心礎を中心とした部分のみ版築が施されており、それ以外の部分には簡便な地形がとられていることが明らかとなった。第6次発掘調査で推定された白色粘土の敷設は少なくとも基壇の周囲、三面におよぶことが明らかとなり、特に心礎北側では白色粘土面上に親指大の玉石が敷かれていたことが確認された。さらに、基壇北端において平瓦が基壇にさしこれるような形で検出されたことは、西に位置する金堂跡が壇上積基壇の可能性をもつことを考え合わせると、塔基壇も基壇化粧をもつた可能性を想わせる。

#### ②金堂跡塔跡

基壇の検出により金堂跡と塔跡の基壇の間隔は12mあまりであることが判明した。金堂跡の基壇の規模は第6次発掘調査の結果と合わせて、東西長16.6m以上24m以下、南北長11.7+αmであることが確認された。

#### ③掘立柱柱穴跡

塔心礎の南40m、西25m付近で掘立柱建物の柱穴跡と見られるピット2基を確認した。2基の柱穴跡は近接し、掘り込み面も異なることから、構築時期は異なるものと推定される。平面的な広がりについては、調査区域の制約から確認することはできなかったが、第3次発掘調査で検出された（注2）ピットと形状が近似していることを指摘することができる。

#### ④堅穴住居跡

塔跡・掘立柱柱穴跡と重複して2軒の堅穴住居跡が確認され、さらに金堂跡で南で1軒、推定寺域南東部付近で2軒が確認された。このうち、塔跡は重複する住居跡が完全に埋没した段階で構築されているものであり、本住居跡の時期が出土土器から鬼高Ⅱ～Ⅲ期に比定されることから、塔跡構築の上臈を示すものと考えられる。

#### ⑤瓦

今年度の発掘調査において、軒丸瓦の新たな発見は見られなかつたが、軒平瓦については2種の新たな意匠が確認された。いずれも唐草文と思われるもので、国分寺に出土例を見ることができるようである。また、今回発見された3個体の唐草文意匠軒平瓦を含めて、既出土の唐草文軒平瓦は全て外区と内区が二重輪縁によって分けられるという特徴を有している。これら意匠は全て国分寺創建以降にかかるものであり、山王庵寺と国分寺との関連を考える上で興味が持たれる。

#### (3)

山王庵寺跡の発掘調査は昭和49年度の第1次発掘調査より第6次発掘調査まで毎年継続して実施されてきたが、今年度、第7次発掘調査は1年間の検討期間を置いて行なわれたものである。衆知のとおり、山王庵寺跡推定寺域内中心部には家屋が建てこんでおり、調査区域も必然と限定され、調査もこれらの閑地をぬって行なわれてきたものである。

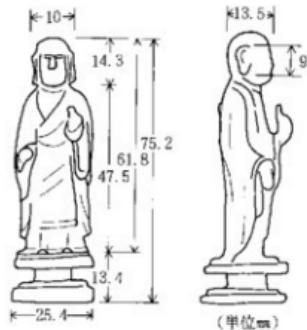
今年度は数少ない閑地の内から、山王庵寺の存在の根拠となった塔心礎の所在する地域、すなわち、日枝神社境内地を主な発掘対象地とした。その結果、塔基壇の規模はつかめたものの、末だ細部の確認には至っていない。しかし、第6次発掘調査で検出された金堂跡（基壇建物跡）と合わせて、山王庵寺の主要伽藍である塔跡が一部であるが確認されたことは大きな成果である。山王庵寺の伽藍配置を法起寺式としたとき、講堂の位置が問題となってくるが、「礎石群B」の存在と合わせて考えなければならない重要な問題である。「礎石群B」に山王庵寺との同時性が考えられ、また東石を伴う礎石建物であったとされる以上、山王庵寺の主要堂塔の一つであったことは否めず、今後の更なる検討を要するものである。

なお、最後になったが本報告書の執筆にあたっては、大江正行（県埋蔵文化財調査事業団）、花岡鉄一（県工業試験場）、住谷修（群馬町東国分）、富沢敏弘（吾妻郡六合中）、飯塚誠（前橋六中）の各氏をはじめとして、多数の方の御教示、ならびに御援助をいただいた。ここに謝す次第である。

（注1） 「山王庵寺跡第3次発掘調査報」（前橋市教育委員会）

（注2） 注1と同じ

## 付1 山王地内出土の地蔵菩薩立像について



插図21 地蔵菩薩立像概念図

今年度の発掘調査地内E区(2780番地)より、昭和34年頃発見されたと伝えられる地蔵菩薩立像を実見する機会を得たので、ここに観察事項を記すことにする(図版7参照)。

緑青の色鮮やかなブロンズ像で、やや赤味をおびることからみて若干の金を含んでいるものと思われる。尊像は頭部を楕円形に作り、右手は垂下して与願印を、左手はあげて忍刀印に結んだ、地蔵菩薩像である。像の本体を側面から見ると、ややずんぐりしているが重厚さがあり、しっかりと整っている。面相は小さいながらも彫り

## 付2 瓦の胎土分析について

群馬県工業試験場 花岡祐一

### はじめに

群馬県には古窯跡が11群ある。前回までに太田市金山窯跡群、安中市秋間窯跡群、中之条町中之条窯跡群などについて分析し、一傾向を知ることができた。今回は新たに山王庵寺出土瓦を中心分析し、その傾向を検討した。

#### ① 依頼内容

この分析に伴う依頼要点は次のとおりである。

1. 山王庵寺出土瓦の胎土傾向の抽出。
2. 比分析試料との比較。
3. 瓦の胎土中に含まれた斑点状物質の成分は何か。

#### ② 分析目的と試験試料

##### 分析目的

山王庵寺は白鳳期に創建された東国の大要寺院で、主要伽藍は瓦葺であった。瓦は県内11個所ノ

試料番号	瓦の種別	胎土の特徴	技法そのほかの特徴
1	平瓦	二種の粘土が混り合なす。黒色鉱物粒を多く含み、白色鉱物粒少ないが含む。秋間窯跡群か。	裏面は撫痕があり、表面は布目細かい。焼成は硬。色調は灰色。
2	平瓦	黒色の鐵鉱物粒を多く含むが、白色の微鉱物粒もわずか含む。砂の火候がわずかにある。秋間窯跡群製か。	裏面は撫痕があり、表面は細い布目が擦り消される。焼成は焼締められている。色調は灰色。
3	平瓦	素地の粒子は極めて荒い。白色の鉱物粒を多く含む。砂の混入は明瞭でない。古井古窯跡群製か。	裏面は撫痕があり、表面は布目荒く、表面粗陥らしき凹凸あり。焼成は硬。色調は表面が焼された黒灰色、中は灰色。
4	平瓦	黒色微鉱物粒を多く含む。白色鉱物微砂の夾雜はない。秋間古窯跡群製か。	裏面は繩印があり、表面に荒い布目。焼成は硬い。色調は黄灰色。
5	平瓦	黒色の微鉱物粒・白色微鉱物粒をわざか含む砂の夾雜はない。秋間古窯跡群製か。	裏面は撫痕あり。表面は布目痕あり。焼成は硬。色調は青みがかる灰色。

付表1 考古学的要目

窯跡群で生産されているが山王庵寺の場合は瓦窯跡出土の軒瓦との同質関係から安中市秋間古窯跡群・多野群吉井町吉井古窯跡と主体的な需給関係が明らかになっている。同時に軒瓦を除く平丸瓦も軒瓦に接続された平・丸瓦の技法・手法からその製作地域の推定がある程度可能である。

今回の分析は、考古学上の視点から製作地域の可能な秋間古窯跡群・吉井窯跡群製瓦を化学的に分析し、胎土傾向を知ることを目的としている。

### 試験試料

試験試料の考古学的な所見は付表1に示した。肉眼観察から見た胎土傾向をまとめると下記のとおりである。

1. 安中市秋間窯跡群と推定される試料はNa<sub>1</sub>・2・4・5である。ともに胎土中に黒色の斑点状物質を特徴的に含んでいる。この黒色物質の成分を知ることも今回の分析に含まれている。素地は概ね緻密で、Na<sub>1</sub>に限っては胎土中に色調の異なる網が認められ、原料の混ぜ合せが考えられる。
2. 多野郡吉井町吉井古窯跡群と推定される試料はNa<sub>3</sub>である。長石か石英粒と考えられる白色の鉱物粒を多く含み黒色鉱物粒は少ない。素地の粒子は荒い。

### ③ 試験方法

分析試料は各試料を10μm以下に粉碎し、5~10gを径4cmの円板に成形し、蛍光X線分析試料およびX線回折試料とした。

元素分析には、蛍光X線分析装置（理学電気製KG-4型）を使用した。管球は銀対陰極、計数法はチャート方式(4°/min)を使用した。詳細な条件は付表2に示した。なおケイ素(Si)、アルミニウム(Al)、マグネシウム(Mg)は定期計数法によった。また、螢光X線分析値は、粘土標準試料（日本標準試料委員会認定・科学技術社発行）R-601, R-602, R-603および先回試料の3点(Na<sub>1</sub>, A, B, C)の湿式化学分析試料を標準として求めた。この値は付表3に示した。

各試料の鉱物組成はX線回折装置（日本電子製J D×5 P型）により求めた。管球は鉄管球を30KV-15mAで使用、時定数1°/minの速度で測定した。

### ④ 試験結果および考察

X線回折結果は付表3、付図1に示した。酸化ナトリウムと強熱減量は分析装置の都合により測定しなかった。Ca/KとSr/Rbは、それぞれの螢光X線強度から計数した。また粘土標準試料の分析値も併記した。付表3のR 601~603である。

分析元素	管電圧 電流	分光 結晶	検出器	波高 分析	時定 数
Fe Si				積	
Rb Mn				分	
Zr Zn	50KV- 20mA	LIF	S+C	方	1
Cu Ni				式	
Cr Ba					
Ca K	40KV- 30mA			積	
Ti Si		EDDT	P+C	分	1
Al				方	
Mg	40KV- 30mA	ADP	P+C	式	1

付表2 萤光X線分析条件

前回までの報告によれば胎土中の Ca/K と Sr/Rb との間に地域特性があり産地分類できるので秋間窯跡群(須恵器), 金山古窯跡群(須恵器・埴輪), 乗付窯跡群(須恵器), 中之条窯跡群(瓦)の Ca/K, Sr/Rb の関係をそれぞれ付図 1 に示し今回の分析結果と対比せた。

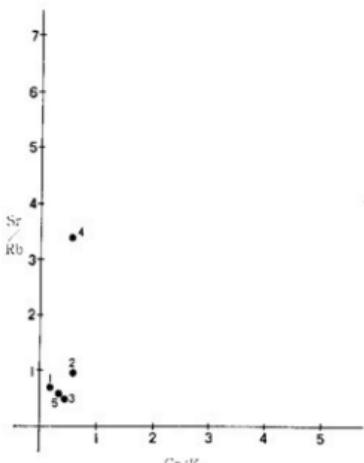
### 1. 胎土傾向と既分析資料との比較

胎土傾向と既成果は付図 1・2 のとおりである。肉眼で共通性のあった Na 1・2・4・5 についてはまとまりがあり, 先回の分析により一傾向を見ている秋間古窯跡群の領域内に Na 3.5 が入り, Na 1・2 が領域外となる傾向がある。秋間窯跡群に近接した領域は太田市金山窯跡群と 2 試料であるが高崎市乗付古窯跡群があり, Na 1・2 に近い。このうち太田市金山窯跡群は組成鉱物に石英粒を多く含み, Na 1・2 の胎土組成と異なるため除外してよい。

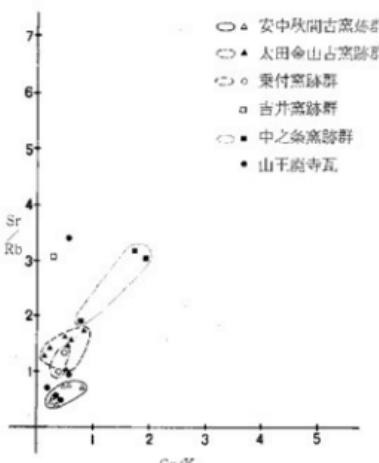
Na 3 は先回分析の吉井古窯跡の 1 点の領域に近接する傾向にあり, Sr/Rb の比では過去に分析した結果から最も高い値となった。

### 2. 斑点状物質の成分

秋間古窯跡群製の須恵器・瓦の胎土夾雜物の特色とされた黒色斑点状物質は X 線回折, X 線マイクロアテナライザによる分析から  $\text{Fe}_3\text{O}_4$  と  $\text{SiO}_2$  の配合物で,  $\text{Fe}_3\text{O}_4$  を主に少しの  $\text{SiO}_2$  (石英) を含むことが判った。



付図 1 山王廻寺試料の分析図



付図 2 各窯跡群との比較

成 分 試 料 \	SiO <sub>2</sub> (%)	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> (%)	TiO <sub>2</sub> (%)	CaO (%)	MgO (%)	K <sub>2</sub> O	計	Ca/K	Sr/Rb
No 1	70.0	16.7	5.20	0.61	0.31	0.88	1.81	95.51	0.235	0.706
No 2	71.2	16.6	3.90	0.75	0.59	0.95	1.40	95.39	0.578	1.00
No 3	68.5	18.0	5.32	0.78	0.57	0.52	1.35	95.04	0.582	3.42
No 4	69.6	17.0	4.70	0.56	0.33	0.92	2.14	95.25	0.212	0.453
No 5	68.8	17.1	5.50	0.74	0.38	0.81	1.56	94.89	0.335	0.549
R-601	50.3	33.0	1.16	0.56	0.15	0.29	1.71		0.11	0.24
R-602	45.9	37.3	0.69	0.12	1.41	0.37	0.58		3.06	51.08
R-603	46.1	37.0	0.66	0.09	1.66	0.29	0.40		5.24	25.58
A	66.7	18.6	6.00	0.94	1.09	1.29	1.39		1.08	2.29
B	64.4	17.1	6.03	0.61	0.86	0.55	2.63		0.46	1.16
C	68.0	17.6	1.65	0.49	0.94	0.58	2.77		0.48	1.21

付表3 各試料の化学組成

#### （参考）

今回の分析は瓦類で前回までの土体は須恵器類であった。両者の間には比較上に問題がある。瓦類はNo.1のように2種の原料粘土の混ぜ合せがあった場合に、単一原料に近い須恵器と大きな成分差が生じると考えられるが、今回の分析試料内では須恵器傾向といちらじるしい差は生じなかった。

しかし、瓦と須恵器とは元来的に製作目的機能などが異っており、常に同一の比較次元に置くことはできない。このため今後は各窯跡群の瓦を分析したうえで、しかも瓦・須恵器は分離して検討する必要がある。

なお、本稿の考古学的所見は田口が担当した。

#### （参考文献）

- (1) 花岡祐一 「土器の胎土分析」「塚掘り古墳群」(群馬県教育委員会) 1980
- (2) 花岡祐一 大江正行 「瓦の胎土分析について」「大代瓦窯跡」(中之条町教育委員会) 1982
- (3) 花岡祐一 真下高志 「温泉遺跡出土須恵器の胎土分析」「保井遺跡」(群馬県埋蔵文化財調査事業団)

1982



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)

- (1) 発掘調査前  
(日枝神社内)
- (2) 塔跡基壇（北より）
- (3) 塔跡基壇断ち割り状況
- (4) 白色粘土面（玉石）
- (5) 塔跡基壇断ち割り状況



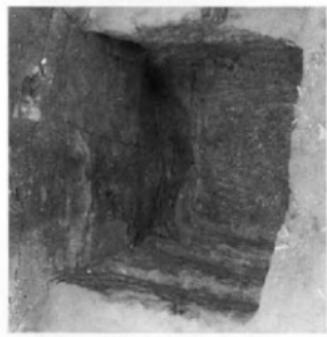
(1)



(2)

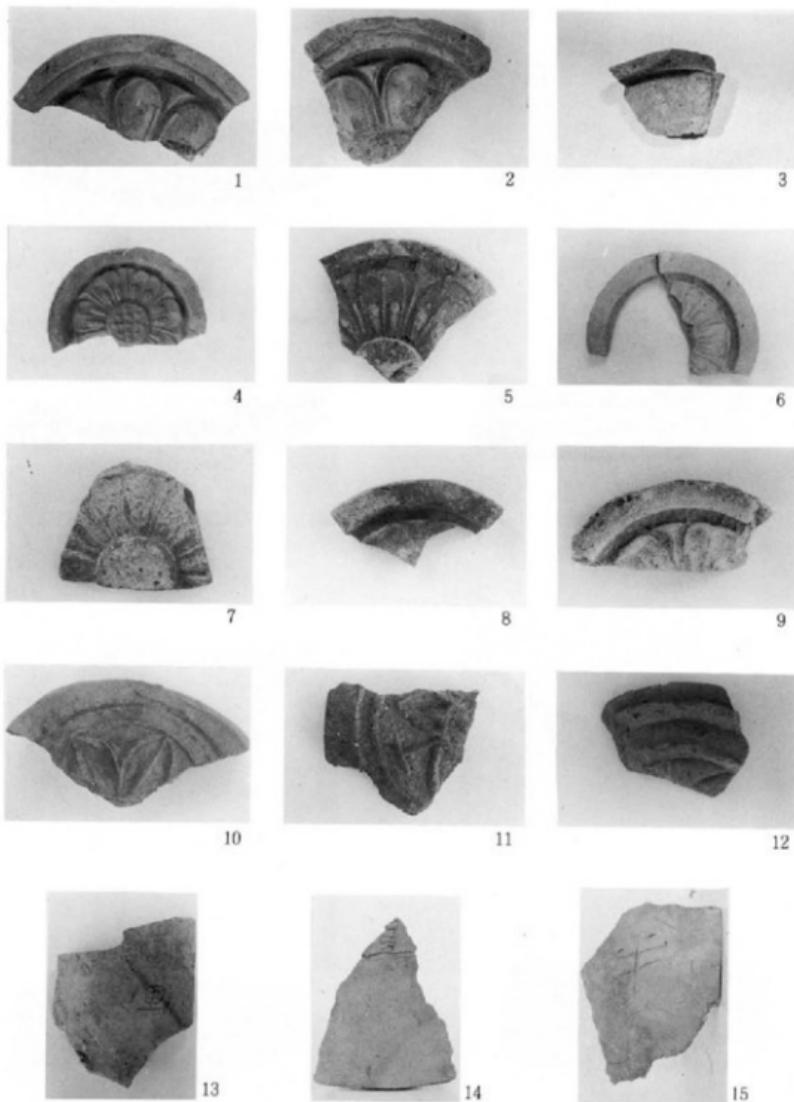


(3)



(4)

- (1) 挿立柱柱穴跡（東より）
- (2) 30号柱脛跡及びP-1  
（西より）
- (3) P-1
- (4) P-2



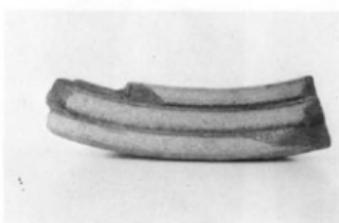
軒 丸 瓦、文 字 瓦



1



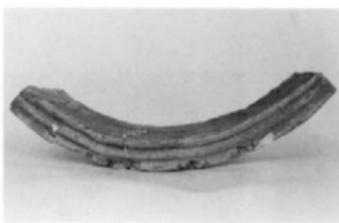
2



3



4



5



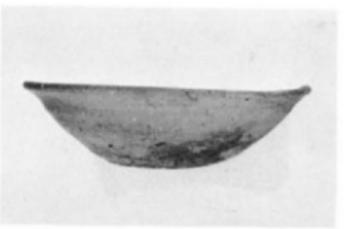
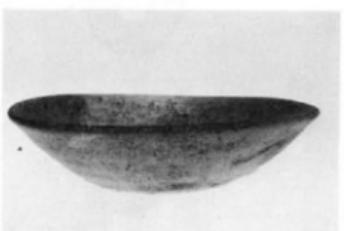
6



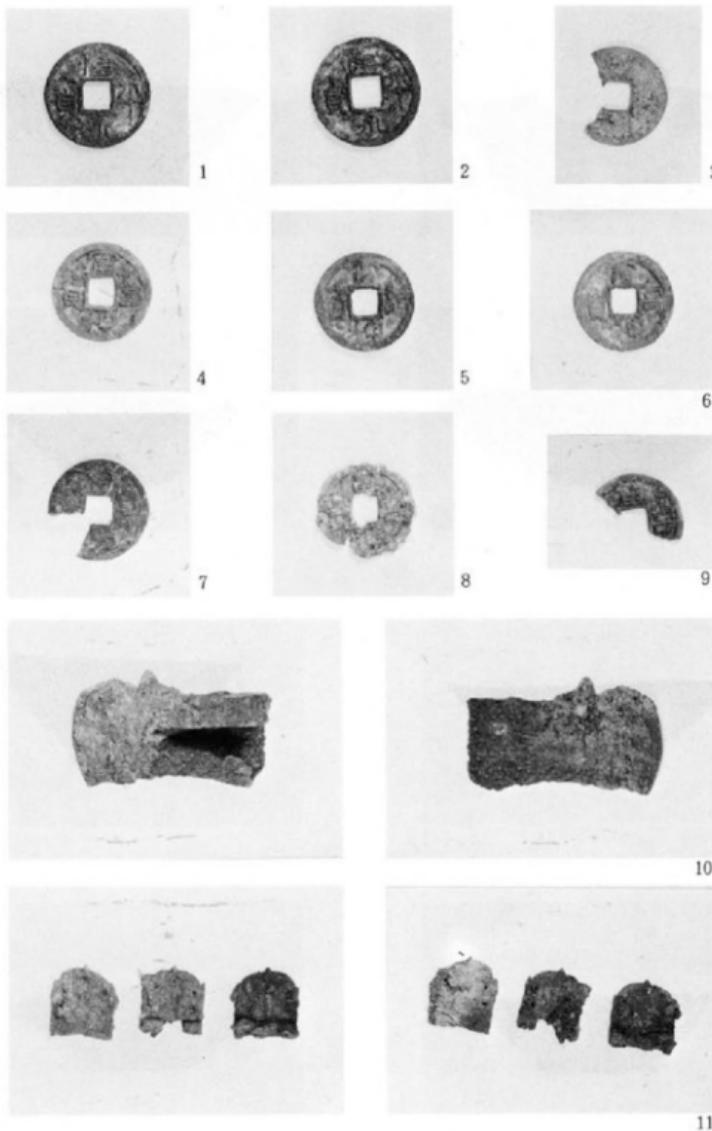
7 軒 平 瓦



8



瓦溜まり状ピット内出土土器



古 銭、鐵 製 品



正面



背面



左侧面



右侧面

地藏菩薩立像

山王庵寺跡第7次発掘調査報告書

昭和57年3月31日 印刷

昭和57年3月31日 発行

発行 前橋市教育委員会

印刷 6362 東田印刷所